



●アルストロメリアの花が最盛期を迎えた落合さんのビニールハウス。アルストロメリアの栽培はここ3年はと手がけているそうです。「以前も作ったことがあり、当時の種子を保存しておいて使っています。春先が花のピークですが、通年で出荷が可能です。夏場は本州の産地では作れないので、6月から12月の出荷に優位性が発揮できるんですよ」

明日を語ろう! 北の農業人

KITANO NOUGYOUTO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々があります。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。



●「こんな花が作れたら」というアイデアを常に持つという落合さん。トゲのないバラや、時期はすれに咲いたクリスマスローズなど、変わった特性を持つ花が現れると、自宅にあるビニールハウスに移して研究や観察を続けるそうです。

●他にはない価値をめざして挑み続ける

「人と同じことはしたくない」という情熱が原動力。
誰もやっていないことに
挑戦するから意義がある。

「北斗市」
落合 修さん



先進的な父親の姿を見て 花き栽培の世界へ

道南の渡島地域では温暖な気候などを受けて、古くから花き栽培が行われてきました。副業として菊などの栽培に取り組む農家もあり、大正時代にはすでに函館で園芸組合が結成されたほど長い歴史を持っています。

現在、JA新はこだて花卉生産出荷組合の理事を務める落合修さんは、花き栽培農家の2代目。昭和26年より花き栽培を手がけてきた先代から経営を引き継ぎました。「父親が花き栽培を始めた頃は花の価値が高く、少ない農地で生産性を高めることができました。新しいことに取り組む人で、昭和30年代半ばには、

すでに育苗用のビニールハウスを導入していました。当時ではかなり進んでいる方だったと思います」

小さい頃から家業を手伝っていた落合さんは、自然に「親の跡を継ごう」と思うようになっていたそうです。地元の農業高校を卒業した後は、父親に付いてまわりながら花き栽培のノウハウを学んできました。独学が中心だった落合さんにとつて、一つの転機になったのが、22歳の時に静岡の園芸農家で体験した研修でした。「知識がなければ質問もできない」と、研修先で手渡された専門書をひたすら読み続けたそうです。「当時の静岡はカーネーション栽培の先進地。土や自分自身の消毒(滅菌)など学ぶことが多く、刺激を受けて帰ってきました」

新しいことに挑む楽しさ 人づくりも大切な仕事

それからの落合さんは、精力的に独自の栽培方法に取り組み始めました。「ダリアと菊の露地栽培に挑戦したり。1年目は失敗したけれど、2年目からは栽培時期を逆算して、育苗を工夫したりすることでうまくいくようになりました。自分がやるように、25歳からは自由に作付けしていました」

30代で親から経営を引き継いだ後は、さらに独自性を追求するようになったという落合さん。「海外の新品種も含め、人が作っていないものを、と考えました。その花が人気が出るかどうかも含めて見極めるセンスが必要でしたね」と振り返ります。

夢と好奇心を持って 独自の栽培技術をめざす

現在は、アルストロメリアやユリ、カラーの栽培が中心です。ポピュラーな花ですが、栽培時期を工夫したり、花に個性のある品種を育てることで、他の産地と競合しないようにしています。「人と同じものは作りたくないだけ」と笑いますが、全国的に品薄となる時期に、いかにいい花を出荷するかというのはどの生産者にとっても重要なテーマ。わかつていてもそれが実行できる人は少ない、と落合さんは言います。

北海道の気候特性を活かした栽培も行っています。今、落合さんが力を注いでいるのが、時期をずらしたカラーの栽培。本州の産地では初夏までが出荷のピークのため、夏から秋にかけて花を咲かすことができれば大きな強みになります。落合さんは自分で交配したカラーの苗で研究を続け、10月までの出荷を実現しようとしています。

新しいことにチャレンジし続けてきた落合さん。「やりたいこと、夢はまだまだある」と、少年のように目を輝かせます。「他にはない価値」をめざして、落合さんの挑戦はこれからも続きます。



●北斗市周辺は夏場の気温に寒暖差があるため、花の色乗りがよくなり、特に8月が美しいのだとか。



●カラーの種を冷蔵庫内で0度に保つことで人工的に休眠させ、開花時期をずらす技術の実用化にも取り組んでいます。



●さまざまな花の苗や鉢が集められたビニールハウスは、まるで試験場のような様子。落合さんはここで品種改良の試験栽培などを行っています。